時代のニーズに応える多彩なサポート

次世代の知を育む教育プログラム

博士課程教育リーディングプログラム
グローバル安全学トップリーダー育成プログラム

グローバル安全学トップリーダー育成プログラムでは、博士課程前期後期一貫教育による人材育成プログラムで、部局の枠を超えて文系・理系を含む学生（リーディングプログラム院生）集団で教育を行っている。人文学の素養、国際性、倫理観、そして明確なビジョンを持ち、学術に立脚した確かな知識をもとに、自ら考え実行できる能力を有し、東日本大震災に代表されるグローバルディザスターから人命・社会・産業を守ることに貢献できるグローバル安全学分野のトップリーダーを育成し、アカデミアのみならず、世界的企業や国際機関などの多様な分野に輩出することを目指している。

このプログラムの特徴は、本学に新設された災害科学国際研究所において「実践的防災学」に基づく学際的かつ先端的な教育研究を行うと共に、工学研究科、理学研究科、環境科学研究科、文学研究科等が参画する文理融合教育である。東日本大震災からの復興現場での活動や世界的研究活動を通じて、専門知識と多様な分野への展開力、リーダーとして必須の能力を持つ「金平糖型」の人材を育成していく。

金平糖型人材のモデル

大学院生対象の大学教員養成事業

東北大学 大学教員準備プログラム (Tohoku University Preparing Future Faculty Program, Tohoku U. PFFP) は、大学教員を目指す大学院生やポストドクトラルフェロー、各種研究員等を対象に、大学教員に求められる能力を育てることを目指した事業である。大学教員の職務は教育、研究、管理運営、社会サービスなど多岐に渡っており、新任の大学教員は戸惑いや大きなストレスを感じがちである。本プログラムでは、様々なセミナーの受講を通し、円滑に初期キャリアを積んでいく事ができるように、大学教員としての様々な能力や知識の獲得を通じて、必要な能力の育成を図る。

参加者オリエンテーション

GSI教育研究センターでの講義（バークレー集中コース）

復興大学・復興人材育成教育コース

復興大学は、学都仙台コンソーシアム加盟機関が協力して４つの事業を推進し、未曾有の大震災からの復興に寄与することを目的として設立された。

東北大学が担当している復興人材育成教育コース事業では、加盟大学の学生を対象に、「復興の政治学」、「復興の経済学」、「復興の社会学」、「復興の思想」、「復興のための生活構築学」および「復興の科学技術」の6科目を開講している。受講生が各大学を卒業した後、災害時などの未知の問題に柔軟かつ迅速に現場で対応でき、日本全国・世界各地の新生を担うリーダーとして活躍できる人材を育成することを目指している。また、2013年２月には一般の方々を対象とした公開講座も開講され、のべ447人が受講した。

宮城県名取市での「復興の思想」現場実習の様子

「復興の科学技術」の講義の様子

オープンキャンパス

毎年7月末頃に2日間の日程で開催される東北大学のオープンキャンパスでは、各学部・研究科で模擬授業や模擬実験、施設見学など様々なイベントが行われている。全国から個人や学校単位での多数の入学希望者や保護者が訪れ、2012年度には2日間合計で57,445人の来場があった。全国の大学で第3位、国立大学では第1位の来場者数となった（朝日新聞出版「大学ランキング」2014年度版より）。また、2013年のオープンキャンパスには昨年を上回る延べ61,600人が来場した。

時代のニーズに応える多彩なサポート

次世代の知を育む教育プログラム

全学教育貢献賞

本学の全学教育の目的達成のため、教育方法及び教育技術の向上を図り、優れた教育を推進することを目的として、全学教育における授業及びその支援、教育方法及びその支援等について優れた業績を挙げた教職員や、創意工夫に溢れる取り組みにより大きな教育上の成果を挙げた教職員を表彰している。2013年1月7日に表彰式が行われた。

芳賀　満 教授
高等教育開発推進センター

国際学士コースプログラムの授業を担当し、異なる文化・言語環境を視野に入れた優れた授業実践を行っている。教育以外にも、様々な研究交流や教育実践交流の促進を行い、広く全学教育を発展させる取り組みを進めており、全学教育に貢献していることが評価された。

小泉 政利 准教授
文学研究科

松﨑　丈 准教授
宮城教育大学

二人でカレントトピックス科目「言語としての手話入門」を担当し、手話を学ぶことを通して、障害をもつ人々への共感と理解を深めるという、社会的にも大きな意義のあるテーマを取り上げた授業を継続的に取り組んでおり、学生からも一貫して非常に高い評価を得ている。このことから、全学教育に貢献していると評価された。

総長教育賞

総長教育賞は、本学の教育理念に基づき、誠意と熱意をもって職務に取り組み、優れた教育の成果を挙げた教職員を表彰するもので、2013年3月27日に仙台市体育館で授与式が行われた。

高等教育開発推進センター
教授　**芳賀　満**

主に国際学士コースの授業において、卓越した語学力を駆使し、異なる文化・言語環境を視野に入れながら、相互理解の促進、複眼的思考を獲得するための優れた授業実践を行い、学生から高い評価を得た。

歯学研究科
助教　**鈴木　敏彦**

継続して解剖学の講義や実習に携わり、主体的課題解決能力を向上させる新たな到達度システムを構築するなどの優れた授業実践を行った。また、震災時の身元確認業務の体験を講義を通じて学生へ伝え、災害医学教育の推進に大きく貢献し、学生からも高い評価を得た。

工学研究科
ν-QI スクール

グローバル COE の教育プログラムによる、ν-QI スクール（学際・国際・産学交流道場）の制度設計・運営を通じて、挑戦的で学際的な研究課題を解決できる独創性豊かな人材を育成する取り組みが、本学の博士課程教育の発展に大きく貢献した。

情報科学研究科
情報リテラシー教育プログラム

学校現場への支援活動や、一般市民向けの公開講座を通じて情報通信技術（ICT）活用能力を身につけさせるための教育を積極的に行い社会貢献を果たすとともに、社会での実践的取り組みを通じて、情報教育の専門職を目指す大学院生の人材育成にも貢献した。

「科学者の卵養成講座」
実施運営委員会

高校生を対象とした次世代型科学者養成プログラムの企画・運営・実践を通じて、多くの高校生へ講義、実習、発表などを組み合わせたプログラムを展開し、双方向型高大連携のモデルとして高い評価を受けた。また、講座修了生の多くが本学へ入学しており、優秀な高校生が本学を志す動機付けとしても大きく貢献した。

教育関係共同利用拠点に認定された活動

教育関係共同利用拠点制度とは、社会と大学のニーズに応え、質の高い教育を提供するため、大学の各分野の人的・物質的資源を他大学と共同で利用する制度で、2009年より文部科学省によって創設された制度である。東北大学では高等教育推進センターに加え、下記の2拠点が認定を受けている。

生命科学研究科附属 浅虫海洋生物学教育研究センター

青森市に位置する浅虫海洋生物学教育研究センターは、1924年の設立以来、本学だけでなく、東北地方の生物学を専攻する各大学・大学院の学生に臨海実習を実施し、かつ各大学が実施する臨海実習に協力している。また、陸奥湾の豊かな生物相を活用して、国際水準の研究を展開している。教育面では、生物を実際の生活している場で観察し、本来の姿で実験出来る強みを生かし、海洋生物を対象とした多彩なメニューからなる、大学・大学院教育を行っている。また、一般や児童などを対象に海洋生物に関する教育普及活動も実施している。

農学研究科附属 川渡フィールドセンター

宮城県大崎市に位置する川渡フィールドセンターは大学附属農場として全国一の規模を誇り、山地から低地にいたる2,200ha の広大なフィールドに、森林・草地・農地が地形に応じて複合的に配置されているという他に例のない特徴を有する。農耕地・草原・森林という個々の生態系は単独で存在している訳ではなく、それらを通して水・養分などが循環し、多様な生物が相互作用している複合系であり、このフィールドを活かした先端的な教育研究が進められている。教育関係共同利用拠点として、これらのことをフィールドで体感しながら、人間の生存基盤である「食」と、「食」を支える「農業」と「環境」について、学びの場を提供している。また、一般市民や児童などを対象にした教育普及活動も実施している。

充実した情報教育・語学教育

主に学部1・2年生が学ぶ川内北キャンパスのマルチメディア教育研究棟に、情報教育用の ICL (Information and Computer Literacy) 演習室と語学教育用の CALL (Computer-Assisted Language Learning) 教室が設置され、合計800台以上のパソコン端末と各種サービスが、全学教育の実施や学生の自習のために提供されている。

全学教育科目「情報基礎」は、「アカデミック・スキル」と「ソーシャル・スキル」の習得を2本の柱とし、文系・理系などの区分ではなく学部横断的に標準化された教育内容で実施されている。外国語学習用に各種のウェブ教材が提供されており、CALL 教室だけでなく、自宅などからも教材にアクセスして学習できる環境が整備されている。